

『聖註』 I.1.1-4和訳([7]-[17])

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島, 岩 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/946

『聖註』I. 1. 1-4和訳([7] - [17])

島 岩

A Japanese Translation of the *Śrībhāṣya* I. 1.1-4([7] - [17])

Iwao SHIMA

[小前主張]

[7] ダルマの考察（祭式についての知識）はブラフマンの考察の前提条件か否か

[前主張（不二一元論者）] ブラフマンの考究（ブラフマンを知りたいという欲求）に先立って必ず必要なものこそが、前提条件だとされるべきである。[だとすれば] ブラフマンの考究にダルマの考察は必要ではない。なぜなら、ウパニシャッドを学んだ者には、祭式についての理解がなくとも、ウパニシャッドの文章の意味の考察が可能だからである。

[前主張への反論] 祭式の一部に基づくウドギータ等の念想³⁵が、まさにここ（ウパニシャッドの中）で論じられているのだが、それ（ウドギータ等の念想）は、祭式について理解していない者には行うことができないのではないか。

[前主張] あなたはまったく、身体を持つもの（アートマン）についての聖典（ウパニシャッド）が[明らかにしようとしている] 認識について分かっていない。この聖典（ウパニシャッド）の中では、生・老・死などからなる輪廻の苦海（その原因は無始の無明によって作り出されたさまざまな区別を直接に見るところにある）に沈んだ者の持つ誤った認識（[これが] 苦しみの根本である）を滅するために、アートマンの唯一性に関する認識が明らかにされようとしているのである。このような人にとって、一体、区別に基づく祭式についての知識が、何の役に立つだというのだろうか。それどころか、[祭式についての知識は、アートマンの唯一性に関する認識とは] まさに対立するものなのである。にもかかわらず、ここ（ウパニシャッドの中）で、祭式に従属するウドギータ等の考察が行

35 *Śrībhāṣya* III.4.21には、ウドギータ念想の例として、“sa eṣa rasānām paramaḥ parārghyo’ṣtamo ya udgīthaḥ”(Chāndogya Upaniṣad I.1.3) があげられている。

われているのは、[その考察が] 知識を本質としているという点では [アートマンの唯一性に関する認識と] 変わらないからである。だが、それ（ウドギータ等の考察）は、[ウパニシャッドの主題であるアートマンの唯一性に関する認識と] 直接に関連しているわけではない。従って、聖典（ウパニシャッド）の中心となる主題（=アートマンの唯一性に関する認識）に必要なものこそが、前提条件だとされるべきなのである。

[前主張への反論] その通りである。その必要なものがまさに、祭式等の行為についての認識なのである。というのは、祭式等の行為と併合された知識から解脱（apavarga）が生ずるのだと、天啓聖典が述べているからである。さらに [『ブラフマ・スートラ』の作者も次のように] 述べている。

「また、[各人生期の祭式等の行為] すべてが必要とされる。なぜなら、[明知を得るためには] 供犠等が [必要だとする] 天啓聖典句があるからである。ちょうど馬の場合に [車を駆るためには馬具等が必要とされる] ように」³⁶

[そして、このような形で] 必要とされる祭式等の行為について知らなければ、[祭式等の行為の中で] どれが [知識と] 併合され、どれが [併合され] ないのかという区別を知ることができないことになる。従って、それ（祭式等の行為についての知識）こそが、[ブラフマンの考察の] 前提条件なのである。

[8] 知識のみが解脱の達成手段であり、祭式等の行為は不要である

[前主張] それは正しくない。なぜなら、純粋精神であってあらゆる特性とは対立するブラフマンを認識することからのみ、無明の止滅が [生ずる] からである。そして、無明の止滅こそが実に、解脱なのである。[一方] 祭式等の行為は、特定の社会階層や人生期、および、[祭式によって] 達成されるべき目的やその達成手段や祭式のやり方というような、無限に任意選択 [可能な区別] に基づいている。[とすれば、そのような区別に基づく祭式等の行為が] どうして、あらゆる区別を直接に見ることの止滅にほかならない無明の止滅を、達成する手段となりえようか。[たとえば] 諸天啓聖典句も、祭式等の行為はその果報が無常なので解脱とは矛盾するものであり、知識のみが解脱の達成手段であるということを、[次のように] 示しているのである。

「この者にとって、それ（祭式等の行為によって得られた功德）は、まさに減びるだ

36 *Brahmasūtra* III.4.26.

ろう」。³⁷

「ちょうど、この世において、祭式によって得られた世界が滅するように、まさにあの世において、福德によって得られた世界は滅びる」。³⁸

「ブラフマンを知る者が最高のものに到達する」。³⁹

「ブラフマンを知る者は、まさにブラフマンとなる」。⁴⁰

「ただ彼（プルシャ）のみを知って、不死に達する」⁴¹等々。

〔9〕 行為はブラフマンを知りたいという気持ちを生み出すのに役立つ

〔先の『ブラフマ・スートラ』(III.4.26)に見られるように〕、「明知には供犠等の行為が必要だ」と〔天啓聖典句には確かに〕述べられている。だが、それ（行為）は事物とは対立するものである。従って、〔供犠等の行為を命ずる〕天啓聖典句の文字〔の意味するところ〕を良く考えてみれば、〔供犠等の行為は〕、内官の浄化を通して、〔事物である実在すなわちブラフマンを〕知りたいという気持ちを生み出すのに役立つのであって、果報（すなわちブラフマンの明知）を生み出すのに役立つわけではない〔ということが分かるだろう〕。何故なら、「〔供犠等の行為によって〕知りたいと望んでいる」⁴²という天啓聖典句があるからである。〔そして、祭式等の行為によって心が浄化され、ブラフマンを〕知りたいという気持ちが生まれた後に、〔ブラフマンの〕知識を生み出すのに直接役立つ手段が、心の平静等なのである。そのことを天啓聖典句が次のように述べている。

「〔このように知る者は〕、心を平静にし、感官を制御し、落ち着いており、忍耐強く、心をよく統一した者となり、自己の中にアートマンを見るべきである」⁴³。

従って、〔心の〕汚れが祭式等の行為（〔ただしその行為は〕、幾百もの前世にわたって遂行されてきたものであり、特定の果報を念頭に置かないものである）によって滅せられて、〔ブラフマンを〕知りたいという気持ちが生まれたときに、次のような聖典の文章か

37 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* III. 8. 10.

38 *Chāndogya Upaniṣad* VIII. 1. 6.

39 *Taittirīya Upaniṣad* II. 1. 1.

40 *Muṇḍaka Upaniṣad* III. 2. 9.

41 *Śvetāśvatara Upaniṣad* III. 8

42 e.g. *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* IV. 4. 22.

43 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* IV. 4. 23.

ら生ずる知識にのみ基づいて、無明が滅するのである。

「愛見よ、太初にはこの[世界]は有のみであった。唯一にして不二であったのだ」⁴⁴。

「ブラフマンは、真実であり、知識であり、無限である」⁴⁵。

「[ブラフマンは] 部分がなく、行為がなく、寂靜であり、非の打ち所がなく、汚れない」⁴⁶。

「このアートマンがブラフマンである」⁴⁷。

「汝はそれなり」⁴⁸。

[10] 聴聞・思惟・瞑想の重要性と聴聞の前提条件

また、聴聞が、聖典の文章の意味を知るのに役立つ。聴聞とは、「ウパニシャッドの諸文章は、アートマンの唯一性という明知を明らかにするものである」という真理を洞察している師から[聞いて、アートマンの唯一性という聖典の文章の]意味を、論理に基づいて把握することである。同様に、思惟とは、師によって教示された[聖典の]意味(すなわちアートマンの唯一性)を、自らのアートマンに関して、「まさにその通りだ」と、根拠に基づいて確立することである。瞑想(nididhyāsana)とは、無始の区別に基づく潜在印象——[それは]これ(アートマンの唯一性の認識)とは対立するものである——を取り除くために、この意味(すなわちアートマンの唯一性)を絶えず念ずることである。こうして、聴聞等によって、区別に基づく潜在印象がすべて取り除かれると、聖典の文章の意味(すなわちアートマンの唯一性)についての知識が、無明を滅することになるのである。従って、このような形の聴聞に必ず必要とされる前提条件こそが、述べられるべきなのである。そして、それ(聴聞に必ず必要とされる前提条件)とは、(1)永遠なものや無常なものを識別すること、(2)心の平静・感覚器官の制御等の手段を得ること、(3)現世と来世において果報を享受したいという欲求を捨てること、(4)解脱を求める者であることという、四つの達成手段である⁴⁹。こ[の四つの達成手段]がそろわなければ、[ブラフマンを]知りたいという欲求が生まれることはない。従って、これ(四つの達成手段)こそが、本来的な意味で、[聴聞の]前提条件であると知られるのである。その趣旨は次

44 *Chāndogya Upaniṣad* VI.2.1.

45 *Taittirīya Upaniṣad* II.1.1.

46 *Śvetāśvatara Upaniṣad* VI.19.

47 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* II.5.19.

48 *Chāndogya Upaniṣad* VI.8.7.

49 Cf. Śāṅkara's *Brahmasūtrabhāṣya* I.1.1.

の通りである。

[11] 祭式等の行為は聴聞の前提条件ではない

区別を直接に見ること——[それは]ブラフマンの本質を覆い隠す無明に基づいており、究極的には実在しない——こそが、束縛の原因である。そして、[この]束縛も究極的には実在しない。そして、それ（束縛）は、究極的には実在しないので、知識によって、その原因[である区別の知覚]とともに、滅せられる。そして、[その束縛を]滅する知識は、「汝はそれなり」⁵⁰等の聖典の文章から生ずるのである。聖典の文章から生ずるこの種の知識に関して、祭式等の行為は、[知識とは対立するものだというその]本性上、それ（知識）が生ずるのに役立つわけでもなければ、[知識の]結果[である解脱が生ずるの]に役立つわけでもない。祭式等の行為はただ、[ブラフマンを]知りたいという気持ち[が生ずるの]に役立つにすぎないのである。すなわち、それ（祭式等の行為が役に立つの）は、[ブラフマンを知りたいという気持ちのもととなる]純質を増大させることに対してであり、[祭式等の行為が]悪の原因である激質と暗質を滅することで[純粋が増大するのである]。そして、このような形で[祭式等の行為が]役に立つことを述べようとして、

「バラモンは、[ヴェーダの学習により、供犠により、布施により、苦行により、また断食により、それ（ブラフマン）を]知りたいと望んでいる」⁵¹。

と述べられているのである。従って、祭式等の行為は、知識には役に立たないので、先に述べた四つの達成手段こそが、[聴聞の]前提条件だとされるべきなのである。

[小定説]

[12] 区別に基づく潜在印象を取り除くのは念想という形の知識である

以上の前主張に対して次のように答える。

[前主張] 無明の止滅が解脱であり、それ（無明の滅）はブラフマンの認識からのみ生ずる。

[定説] 先にこのように述べられていたが、このことにはわれわれも同意する。そこで

50 *Chāndogya Upaniṣad* VI. 8. 7.

51 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* IV. 4. 22.

次に、無明を滅するために、ウパニシャッドの諸文章が命じようと望んでいる知識とは、どのような形のものかについて、よく検討すべきである。それは、聖典の文章から生じた文章の意味についての単なる知識なのだろうか、それとも、それ（文章の意味）に基づく念想という形の知識なのだろうか。まず第一に、文章から生ずる[単なる]知識ではない。というのは、(1) それ（文章から生ずる知識）は、教令がなくとも、文章のみに基づいて成立するからであり、また、(2) それだけでは、無明が滅することは認められないからである。

[前主張者の反論] 区別に基づく潜在印象が取り除かれていないときには、聖典の文章が、無明を滅する知識を生み出すことはない。[また、無明を滅する] 知識が生じて、区別に基づく認識が、すべての人にとって一度に滅することがないのは、欠陥へと通ずるものではない。月が一つであることが知られても、二つの月の認識が滅することはなく、[区別に基づく潜在印象は]、まだ滅していなくとも、[その] 原因は断ち切られているので、束縛へと導くものとはならないのである。

[定説] このように反論すべきではない。というのは、[知識を生み出すのに必要な] 手段がそろっているのに、知識が生じないということはあるからである。また、たとえ[唯一性の知識とは] 対立する潜在印象が存在していたとしても、信頼できる人の教示や[推論の] 徴標等によって、[その潜在印象を] 拒斥する知識⁵²が生ずることは経験されるからである。

[前主張者の反論] 聖典の文章の意味を知っていても、無始の潜在印象のせいで、区別に基づく認識は存続するのである。

[定説] このようにあなたは主張することはできない。なぜなら、潜在印象は、区別に基づく認識を生み出す手段の集まりではあっても、性質上は誤りなので、[正しい] 知識が生ずるとすぐになくなってしまふからである。たとえばもし、[正しい] 知識が生じて、性質上誤りであるそれ（潜在印象）がなくなるとすると、[誤りを] なくすものは[正しい知識] 以外にはないわけだから、この潜在印象はいつまでも決してなくなるということになるだろう。潜在印象の結果である区別に基づく認識が、[正しい知識によって] その根源が断ち切られたのちも存続するなどというのは、子供の言うことである。だが、月が二つに見える等の認識の場合には、[その認識を] 拒斥するものが近くにあっても、誤った認識の原因である実在する[眼病] ティミラ等の欠陥は、知識によって拒斥されることはないためなくなるので、誤った認識が存続するのは矛盾ではない。だが、[縄を見て蛇だと思って] 怖がる等の結果は、[縄だとする] より強力な認識根

52 拒斥 (bādha) とは、認識の正誤を判定する基準となるもので、後に生じた認識によって拒斥されたものは誤った認識である。

拠によって拒斥されると、消滅するのである。さらにもし、「知識が生ずるのは、区別に基づく潜在印象を取り除くことを通してである」と考えるとすると、知識が生ずることなど決してありえないことになるだろう。なぜなら、区別に基づく潜在印象のほうは、無始の時間によって積み重ねられたものだから、限りがないのにたいして、それ（区別に基づく潜在印象）と対立する念ずることのほうは、[現世限りのもので] ごく限られているので、それ（区別に基づく潜在印象と対立するアートマンの唯一性を念ずること）によって、それ（区別に基づく潜在印象）を取り除くのは不可能だからである。従って、ウパニシャッドの諸文章が命じようと望んでいるのは、聖典の文章の意味についての[単なる]知識ではなくて、瞑想（*dhyāna*）とか念想（*upāsana*）という言葉で表現されている知識のほうなのである。そのことを諸天啓聖典句が次のように述べている。

「[それ（アートマン）を] 識別して、理知を働かせるべきである」⁵³。

「[アートマンを] 見出して、認識する [べきである]」⁵⁴。

「アートマンをオームとして瞑想すべきである」⁵⁵。

「[それを] 理解すれば、かの死の口から解放されるだろう」⁵⁶。

「アートマンだけを [真の] 世界として念想すべきである」⁵⁷。

「おお [マイトレーイーよ]。実にアートマンが見られるべきであり、聴聞されるべきであり、思惟されるべきであり、瞑想されるべきである」⁵⁸。

「[人は] 彼（アートマン）を探求すべきであり、彼（アートマン）を認識しよう望むべきである」⁵⁹等々。

[13] ウパニシャッドが命じている知とは念想のことである

このうち、「[アートマンを] 見出して、認識する [べきである]」や「[それ（アートマン）を] 識別して、理知を働かせるべきである」等[のウパニシャッドの諸文章]は、「[アートマンが] 瞑想されるべきである」等[の諸文章]と意味するところは同じである。従って、[これらの諸文章は]、「[アートマンを] 見出して」「[それ（アートマン）を] 識別して」という形で、聖典の文章の意味（=アートマン）についての知識に[まず]言及し（な

53 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* IV.4.21.

54 *Chāndogya Upaniṣad* VIII.7.1.

55 *Muṇḍaka Upaniṣad* II.2.6.

56 *Kaṭha Upaniṣad* III.15.

57 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* I.4.15.

58 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* II.4.5.

59 *Chāndogya Upaniṣad* VIII.7.1.

ぜなら、[聖典の文章の意味＝アートマンについての知識は] 瞑想の手助けとなるからである)、[そののち次に]「理知を働かせるべきである」「認識する[すべきである]」と[聖典の文章の意味＝アートマンの] 瞑想を命じているのである。

[一方、「実にアートマンが聴聞されるべきであり、思惟されるべきであり、瞑想されるべきである」という文章において]「聴聞されるべきである」というのは再言及である。というのは、聴聞は[すでにここ以外の個所で命じられていて]すでに理解されている事柄だからである。なぜなら、ヴェーダが好ましい事柄を目的とするものだという形でヴェーダを学習した人は、[ヴェーダが]有意義な結果をもたらす好ましい事柄について教示するものだという事についてはすでに理解しているので、それ(有意義な結果をもたらす好ましい事柄)[とは何か]を確定するために、自らすすんで聴聞を開始するからである。また「思惟すべきである」というのも、再言及である。なぜなら思惟は、聴聞したことを確固たるものにするためのものだからである。従って、瞑想(dhyāna)だけが命じられているのである。[そのことについては『ブラフマ・スートラ』の作者がのちに次のように]述べることであろう。

「[アートマンの念想は]しばしば反復して行うべきである。なぜなら、[聖典の中でそのことが]教示されているからである」⁶⁰と。

従って、[ウパニシャッドの諸文章が]、解脱へ的手段であるとして命じようと望んでいる知(vedana)とは、念想(upāsana)のことだと理解されるのである。なぜなら、[次に例を挙げるように、それぞれのウパニシャッドで各主題の]冒頭部から結論部まで[一貫して]、知ること(vidi)と念想すること(upāsti)とは異ならないとされているからである。

[たとえば]

「思考器官をブラフマンとして念想すべきである(upāsita)」⁶¹。

と始まり、

「このように知る(veda)者は、名声により、名誉により、ブラフマンの栄光により、光輝く」⁶²。

[と終わっている。また]、

「彼はまだ知ら(veda)ない。なぜならそれは全体ではなくて… [彼はそれを]アー

60 *Brahmasūtra* IV. 1. 1.

61 *Chāndogya Upaniṣad* III. 18. 1.

62 *Chāndogya Upaniṣad* III. 18. 6.

63 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* 1. 4. 7.

トマンとして念想すべきである」⁶³。

[ともある。また]、

「あの方が知っていることを知っている (veda) 人のところへ、[その功德がすべて集まるのだ]。私が言ったのは、その方のことなのだ」⁶⁴。

と始まり、

「尊いお方よ、あなたが崇敬している (upāsse) 神格を、どうか私に教えてください」⁶⁵。
と [続いているのである]。

[14] 知とは念想であり確固たる想起である

瞑想 (dhyāna) とは、想起が、油の流れのように途切れなく、連続していくことである。
なぜなら、

「想起が確固としたものとなる。[この確固たる] 想起が得られると、すべての結び
(束縛) から解放されるのである」⁶⁶。

と、確固たる想起が解脱 (apavarga) への手段であることが、天啓聖典句に述べられて
いるからである。そしてその [確固たる] 想起は、直接に見ることと同じ姿をしたもので
ある。というのは、[想起を説く先の天啓聖典句の] 意味するところは、

「高くかつ低いそれ (アートマン) が見られると、心臓の結びが解かれ、すべての疑
いが払われて、その人の行為は消滅する」⁶⁷。

というのと同じだからである。そしてこのようであるときに、

「おお [マイトレーイーよ]。実にアートマンが見られるべきであり、[聴聞されるべ
きであり、思惟されるべきであり、瞑想されるべきである]」⁶⁸。

というこ [の文章] によって、瞑想が直接に見るという形のものであることが述べられ

64 *Chāndogya Upaniṣad* IV. 1. 4.

65 *Chāndogya Upaniṣad* IV. 2. 2.

66 *Chāndogya Upaniṣad* VII. 26. 2.

67 *Muṇḍaka Upaniṣad* II. 2. 8.

68 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* II. 4. 5.

ているのである。想起は、念ずることが強まったものであるから、直接に見ることという姿をしているのである。このことすべてが、文章作者（タンカ）⁶⁹によって [次のように] 説明されている。

「知（vedana）は念想のことである。というのは、そのことに関して、天啓聖典にそう述べられているからである」と。

つまり [彼は]、すべてのウパニシャッドで解脱の達成手段として命じられている知（vedana）とは念想のことだ、と言っているのである。[たとえば、文章作者は]

「一度だけ念想（pratyaya）を行うべきである。なぜなら、聖典の言葉の意味は [一度だけで] 実現されるからである。ちょうど前駆祭等⁷⁰ [で供物を捧げるのは一度だけである] ように」

と前主張を立てて、

「だが、念想という言葉があるので、[繰り返し行うべきであると] 確定される」

と、繰り返し反復された知（vedana）が、解脱の達成手段であると確定されるのである。[そしてさらに]

「念想とは確固たる想起のことである。なぜなら、[そのように] 見られており、また、典拠となる聖典の言葉があるからである」

と、念想という形の繰り返し反復された知（vedana）が、確固たる想起であると説明されているのである。

[15] 念想はバクティである

[なお] この [確固たる] 想起が、直接に見ること [と同じ] 姿をしたものであるとい

69 Cf. 中村元『ヴェーターンタ哲学の発展』岩波書店、1955、pp.93-118.

70 本祭の前に行われる予備的な祭式で、たとえば、新満月祭のときには、その前に、薪を供犠する等の五つの前駆祭がまず行われる。

うことについては、先にすでに明らかにした通りである。そして、直接に見ることという姿をしているということは、直接知覚の性質を備えているということである。[従って、天啓聖典も] 同じように、想起が、直接知覚の性質を備えており、解脱の達成手段であることを、[次のように] 特徴づけているのである。

「このアートマンには、言説（すなわち思惟）によっても、知性（すなわち瞑想）によっても、聴聞によっても、達することはできない。これ（アートマン）が選んだ者だけが、[アートマンに]達することができ、その者にたいして、このアートマンは、自らの姿を開示するのである」⁷¹。

とこ [の文章] によって、単なる聴聞・思惟・瞑想は、アートマンに到達する手段ではないことを述べたのちに、

「これ（アートマン）が選んだ者だけが、[アートマンに] 達することができる」⁷¹。

と述べているのである。というのは、最も愛しい者だけが、選ばれるのにふさわしいからである。[そして] ある者にとってこの者（最高神）がこれ以上ないほど愛しいとき、その者がこの者（最高神）にとって最も愛しい者となる。[すると] この最も愛しい者がアートマンに到達できるよう、最高神が自ら努力してくださるのである。そのことを最高神が次のように述べておられる。

「常に修練し、愛情をもって [予を] 崇拜する彼らに対して、予はかの知性のヨーガを授ける。それによって彼らは予に達する」⁷²。

「知識ある者に予は極めて愛せられ、また彼は予に愛せられるから」⁷³と。

従って、想起されるもの（最高神＝最高のアートマン）がとても愛しいものなので、[それを] 直証するという形の想起をとっても愛しく思っている人だけが、最高のアートマンによって選ばれるのにふさわしい者となるのである。そのため、そのような人だけが、最高のアートマンに達するのである。これが [この引用文の] 趣旨なのである。[そして] このような形の確固たる想起がまさに、バクティという語で表現されている。なぜなら、バクティという語は、念想と同義語だからである。その意味で、天啓聖典と聖伝書は次のよ

71 *Kaṭha Upaniṣad* II.23.

72 *Bhagavadgītā* X.10.

73 *Bhagavadgītā* VII.17.

うに述べている。

「ただ彼（プルシャ）のみを知って、不死に達する」⁷⁴。

「彼のみをこのように知って、この世で不死となる。最終的な解脱への道はこれ以外にはないのである」⁷⁵。

「ヴェーダによっても、苦行によっても、布施によっても、祭祀によっても [汝が見たのと同じような予を見ることはでき] ないのである」⁷⁶。

「しかし、アルジュナよ、ひたすらのバクティによって、そのような予を真に知り、かつ見て、予に入ることができるのである。敵を悩ます者（アルジュナ）よ」⁷⁷。

「それは最高のプルシャである。プリターの子（アルジュナ）よ、それは、しかし、もっぱらのバクティによって得られる」⁷⁸。

[16] 確固たる想起を生み出す手段が祭式等の行為である

このような形の確固たる想起を達成する手段が、供犠等の諸行為であるということは、

「また、[各人生期の祭式等の行為] すべてが必要とされる。なぜなら、[明知を得るためには] 供犠等が [必要だとする] 天啓聖典句があるからである。ちょうど馬の場合に [車を駆るためには馬具等が必要とされる] ように」⁷⁹

と後に述べられるであろう。確かに供犠等は、

「[バラモンは、ヴェーダの学習により、供犠により、布施により、苦行により、また断食により、それ（ブラフマン）を] 知りたいと望んでいる」⁸⁰。

とあったように、[ブラフマンを] 知りたいという気持ちを生み出すのに役立つものである。にもかかわらず、[内的な] 瞑想という形のそれ（供犠等の行為）、すなわち知 (ve-

74 *Śvetāśvatara Upaniṣad* III. 8.

75 *Taittirīya Āraṇyaka* III. 12. 7

76 *Bhagavadgītā* XI. 53.

77 *Bhagavadgītā* XI. 54.

78 *Bhagavadgītā* VIII. 22.

79 *Brahmasūtra* III. 4. 26.

80 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* IV. 4. 22.

dana) は、日々行えば、反復実践により優れた性質が [人に] 付け加わっていくので、死に至るまで続ければ、ブラフマンに達する達成手段となる。従って、各人生期の祭式等の行為すべては、それ (知) を生み出すために、生きているかぎり、遂行されるべきなのである。そして [そのことはスートラ作者も] 後に次のように述べることであろう。

「死に至るまで (念想を反復すべきである)。なぜなら、そのとき (臨終) においてさえも [念想を行うべきだとする教えが] 聖典の中に認められるからである」⁸¹。

「だが、アグニホートラ祭等 [の人生期の義務] は、まさにその結果 (明知が生ずること) のために役立つものである。なぜならそのことが、聖典の中に説かれているからである」⁸²。

「また、[各人生期の祭式等の行為は、明知を生み出すことを通して、明知の] 補助となるものであるから、[遂行されるべきである]」⁸³。

また、文章作者も、確固たる想起が識別等から生ずることを、次のように述べている。

「そ (堅固な想起) の獲得は、(1) 識別、(2) 無執着、(3) 反復実践、(4) 祭式行為、(5) 美德、(6) 意気消沈しないこと、(7) 浮かれないことから生ずる。なぜなら、そうすることによってのみ可能だからであり、また、典拠となる聖典の言葉があるので」と。

[そして文章作者は]、識別等の本質を次のように述べている。「(1) 識別とは、種類の [汚れておらず]、所有者や [その他の] 原因によっても汚されていない食物 [を摂取すること] により、身体が清浄であることである」。これに関して次のような典拠となる聖典の言葉がある。

「食物が清浄であるときに、心は清浄となる。心が清浄であるときに、想起は確固たるものとなる」⁸⁴。

「(2) 無執着とは欲望に執着しないことである」。典拠となる聖典の言葉は次の通りである。

81 *Brahmasūtra* IV. 1. 12.

82 *Brahmasūtra* IV. 1. 16.

83 *Brahmasūtra* III. 4. 33.

84 *Chāndogya Upaniṣad* VII. 26. 2.

「[心を] 平静にして、念想すべきである」⁸⁵。

「(3) 反復実践とは、やり始めたことを繰り返し行うことである」。聖伝書の典拠となる言葉が、註作者（ドラミダ師）⁸⁶によって、次のように引用されている。

「[死に臨んで、人が、いかなる状態を念じつつ肉体を捨て去っても]、彼は常にその状態に傾向づけられ、[まさしくその状態に赴く]」⁸⁷。

「(4) 祭式行為とは、五大供犠⁸⁸等を、能力に応じて、執行することである」。典拠となる聖典の言葉は次の通りである。

「この祭式行為を行う者は、ブラフマンを知る者のなかで最上の者である」⁸⁹。

「バラモンは、ヴェーダの学習により、供犠により、布施により、苦行により、また断食により、それ（ブラフマン）を知りたいと望んでいる」⁹⁰。

「(5) 美德とは、真実、率直、慈愛、布施、不殺生、無欲である」。典拠となる聖典の言葉は次の通りである。

「真実によって… [このアートマンは] 得られる」⁹¹。

「[真実に住する] 彼らにとってのみ…この穢れのないブラフマンの世界がある」⁹²。

「(6) 意気消沈とは、時にも所にもめぐまれないために、また、悲しい事柄などを思い出したために生ずる悲しい気持ちで、心が晴れないことである」「その反対が意気消沈しないことである」。典拠となる聖典の言葉は次の通りである。

85 *Chāndogya Upaniṣad* III. 14. 1.

86 Cf. 中村元『ヴェーダータ哲学の発展』岩波書店, 1955, pp. 119–152.

87 *Bhagavadgītā* VIII. 6.

88 五大供犠とは、神 (deva)、バラモン (brāhmaṇa)、祖霊 (pitṛ)、諸霊 (bhūta)、人 (nara) に対する日々の供犠 (yajña) である。

89 *Muṇḍaka Upaniṣad* III. 1. 4.

90 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* IV. 4. 22.

91 *Muṇḍaka Upaniṣad* III. 1. 5.

92 *Praśna Upaniṣad* I. 15–16.

93 *Muṇḍaka Upaniṣad* III. 2. 4.

「このアートマンは、力の弱い者には得られない」⁹³。

「(7) それ (意気消沈) とは逆のものから生ずる喜びが、浮かれることあり、それとは逆のものが浮かれないことである」。すなわち、過度の喜びは、[ブラフマンの知識が生ずるのを]妨げるものであるという意味である。典拠となる聖典の言葉は次の通りである。

「心を平静にし、感官を制御し」⁹⁴。

[17] 祭式についての知識がブラフマンの考究の前提条件である

以上のように、宗教的規定を遵守している人の場合には、各人生期で命じられている祭式等の行為を遂行することによってまさに、明知が生ずるのだと述べられているのである。同じ趣旨で次のような他の天啓聖典句もある。

「明知と無明の両者をともに知る者は、無明によって死を越え、明知によって不死に達する」⁹⁵。

ここで、「無明」という語で言い表されているのは、社会階層と人生期に応じて命じられている祭式等の行為のことである。すなわち、無明によって (祭式等の行為によって) 死を (知識の発生と対立する過去の業を) 越え (滅し)、明知によって (知識によって) 不死に (ブラフマンに) 達する (到達する)、という意味なのである。[そして] 死 (過去の業) を越える手段として理解されている無明とは、明知とは別に命じられている祭式等の行為のことである。たとえば [そのことが] 次のように述べられている。

「彼はまた、[祭式に関する聖典の] 知識に基づきながら、とても多くの供犠を行った。ブラフマンの明知を目指して、[まず] 無明 (祭式等の行為) によって死 (過去の業) を越えるために」⁹⁶。

[なお] 知識と対立する業には、善業と悪業とがあるが、両者ともに、ブラフマンの知識の発生とは対立するため、望ましくない果報をもたらすので、悪業という語で表現されるべきものなのである。そして、これ (悪業=業) が知識と対立することになるのは、知

94 *Bṛhadāraṇyaka Upaniṣad* IV. 4. 23.

95 *Īśā Upaniṣad* 11.

96 *Viṣṇu Purāṇa* VI. 6. 12.

識の発生の原因である清浄な純質とは対立する激質と暗質の増大を通してである。また、悪業が知識の発生と対立するものであることは、次のような天啓聖典句から分かる。

「この者は実に、下へ導こうと望む者には悪業をなさしめるのである」⁹⁷。

また、激質と暗質がありのままの知識を覆うものであり、純質がありのままの知識の原因であることについては、最高神が自ら次のように明らかになさっている。

「純質からは知識が生じ云々」⁹⁸。

従って、知識が生ずるためには、悪業が取り払われる必要があるのである。そして、それ（悪業）を取り払うのは、果報を念頭に置かずに遂行されたダルマによるのである。そのような趣旨で次のような天啓聖典句がある。

「ダルマにより悪業を減する」⁹⁹

以上のように、ブラフマンに達する達成手段である知識には、すべての人生期のダルマが必要なのである。従って、祭式等の行為の本質についての知識（＝ダルマの知識）が必要とされ、祭式等の単なる行為は果報が少なく不確かであるという知識はカルマ・ミーマンサーにおいて確定されるので、それ（カルマ・ミーマンサー）こそが必要なものであり、ブラフマンの考究の前提条件だとされるべきなのである。

97 *Kauṣītaki Upaniṣad* III.8.

98 *Bhāgavadgītā* XIV.17.

99 *Mahānārāyaṇa Upaniṣad* XXII.1.